

## 文化変容論 : シェイクスピア作品への試み

徳見, 道夫  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5522>

---

出版情報 : 言語文化論究. 18, pp.45-51, 2003-06-25. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン :  
権利関係 :

## 文化変容論

—— シェイクスピア作品への試み ——

徳 見 道 夫

### 1

近年、異文化接触による文化変容に関する論文が多く出されている。特に、アジア地域研究において、その文化変容が詳細に取り沙汰されているが、ヨーロッパでの文化変容に関する論考は意外に少ないように思われる。ヨーロッパでも文化変容の例は枚挙に暇がないほどであり、それはシェイクスピアの『テンペスト』を見れば一目瞭然であろう。アロンゾやアントニオたちが、キャリバンという半人半獣の登場人物に出くわす驚異、あるいは新世界との遭遇を匂わすような島への漂流——これらの事象はヨーロッパ文明が異文化接触により自国の固有の文化変容を余儀なくされる瞬間である。この論文では、文化変容論を援用して、シェイクスピアの作品、とりわけ一見文化変容とは関係ないと考えられている歴史劇を、新しい視点から解釈しようとするものである。

シェイクスピアは歴史劇と呼ばれる一連のイングランドの歴史を題材として演劇を書いていた時期があった。彼が利用した書物は主にホリンシェッド (Raphael Holinshed) やホール (Edward Hall) の歴史書や先行の演劇であるが、彼はそれらの材源を利用しながら、彼独自の視点で歴史劇を書いているので、彼が演劇を書く行為は、彼独自の歴史解釈——大きく言えば、歴史・文化にある衝撃を与えるものであると言える。彼の作品が上演された後に、ある事象や人物に大きな社会的な意味付けの変化が起きることがあるが、これは演劇と社会との出会いにより、その社会の文化の変容を作り出したと言えるであろう。もっとも分かりやすい例として、シェイクスピアの人口に膾炙している『ベニスの商人』を見てみよう。シャイロックという特異な登場人物は、ユダヤ人で金貸しを商売として、憎いアントニオの肉と (その結果として) 命を奪い取ろうとする。この作品が発表された後、ユダヤ人のイメージが固定化あるいは強化されたことは容易に想像することができる。すべてのユダヤ人は「強欲で人でなしだ」という現実とはまったくかけ離れたイメージが、シェイクスピアの作品の影響によりイングランド社会に固定化されることになる。異教徒であるユダヤ人とイングランドの人々、特にロンドンの人々との接触の中から生まれたイメージであろうが、シェイクスピアが『ベニスの商人』を書くことにより、ユダヤ人はキリスト教社会から排除されるべき負のイメージとして固定化・強化されることになる。ここには、自国文化への自信に溢れており、シェイクスピアが晩年描いた『テンペスト』とは様相がかなり異なっている。シャイロックの娘ジェシカが、ユダヤ教からキリスト教に改宗する成り行きは、この劇の性格を明確に表現しているように思われる。

このように固定化されたイメージは、個々人の特徴は問題とせず、全体としてのユダヤ

人の曖昧な共通性を浮き彫りにしている点では、近年の戦争における情報戦にも通じるものである。異文化接触の中でもっとも悲惨な例は戦争であるが、敵を人間ではなく野獣のようなものだとするイメージの植付けは、太平洋戦争中に日本軍が流す報道にも見られたものである。異文化の人々を人間と認めず、野獣のような存在と解釈したとしたら、そこには異文化接触は悲惨なものとなり、負の方向への文化変容が生まれてくる。『ベニスの商人』でシェイクスピアが行った文化変容は、ユダヤ人への偏見を助長するという意味において、負の方向へのものだと言えるであろう。この劇以降のユダヤ人のイメージは、イギリス社会において、固定化されたものとなっていった。『ベニスの商人』が翻訳され、多くの国で上演されると、そのイメージは全世界に広まり、多くの人々の固定観念となっていった。

## 2

文化変容とは、ある文化の固有性が揺すぶられることと定義すれば、シェイクスピアが史実・文化の変容を作り出している例は、『ヘンリー五世』の中にも見られる。彼の歴史劇はすべて文化の変容——作品の発表以降ある文化的思考の絶対性に揺らぎが加えられること——を与えているが、特に『ヘンリー五世』の例が明白なように思われる。シェイクスピアは『ヘンリー五世』を書くとき、ホリンシェッドや先行の演劇の記述を参考にしつつ、ある程度これまでの歴史観を変更している。例えば、史実のヘンリーはフランスとの戦いにおいて、綿密な計画を立てて勝利を勝ち取ったにもかかわらず、シェイクスピアは神の恩寵によってイングランドがフランスに勝利したように描いている。

O God, thy arm was here;  
 And not to us, but to thy arm alone,  
 Ascribe we all! When, without stratagem,  
 But in plain shock and even play of battle,  
 Was ever known so great and little loss,  
 On one part and on th' other? Take it, God,  
 For it is none but thine! (IV.106-111)<sup>(1)</sup>

このような表現は、結果として当時の国王（エリザベス一世）の神格化、および王室の絶対性を強調するものである。作家が作品を書くとき、彼あるいは彼女は自由に題材を取捨選択し組み立てることができ、それまでの文化的思考に大きな変容を迫ることができる。前述した『ベニスの商人』のシャイロックがその例である。

しかし、E. M. W. Tillyard は、『ヘンリー五世』に関する言及で、ヘンリー五世個人に関する伝説や史実が、シェイクスピアに自由に作劇をさせなかったと、次のように論じている。

Tillyard considers that the weight of historical and legendary tradition hampered Shakespeare too greatly; that the inconsistencies of Henry's miraculously changed character, the picture of

the ideal king and the good mixer were “impossible of worthy fulfillment”.<sup>(2)</sup>

確かに、史実や伝説はある程度固定しており、作家の自由な創造を抑えることは認めざるを得ない。だが、作家、特にシェイクスピアのような融通無碍な作家は、題材を巧妙に選択することにより、また強調の度合いを微妙に変化させることにより、新しい人物像や事象の解釈を観客に提供し、それまでの固定化された人物像や歴史的事実にある揺らぎを与える。その揺らぎがその作家の独創性とされるものであるし、文化変容にも通じるものである。換言すれば、文化変容を生じさせないような演劇はありきたりで、観客にとって面白くないものとなる。

シェイクスピアが先行の劇や歴史書という題材を自由に取捨選択して、文化や歴史に揺らぎを作り出している事例を挙げてみよう。『ヘンリー五世』の材源と言われている『ヘンリー五世の著名な勝利——アジンコートにおける名誉ある戦いを含む』（1598年）の中には、ケンブリッジ、スクループ、グレイ達の貴族の裏切りが暴露される場面は描かれていないが、シェイクスピアは『ヘンリー五世』の中で、ヘンリーがフランス遠征に行く直前に、この事件を導入している。この事件はシェイクスピアが以前に書いた『ヘンリー四世』との関連により、この作品に入れざるを得ないし、フランス遠征に出かける直前のイングランド兵士の人心の統一を描くために、どうしてもシェイクスピアには必要なものであったと思われる。この事件の導入により、ヘンリーの人物像に、これまでとは違った印象を観客に与えることになる。ここでもヘンリーは裏切りの暴露を神の恩寵であると公言し、次のように述べているが、

We doubt not of a fair and lucky war,  
 Since God so graciously hath brought to light  
 This dangerous treason lurking in our way  
 To hinder our beginnings. (II.ii.184-187)

彼の言葉はフランスへの遠征が神から認められた行為であることを民衆に伝える働きをする。

上記の例は、シェイクスピアがある事件を作品に導入した一例であるが、ロラード派とジョン・オールドカースル卿 (Sir John Oldcastle) の処刑については、彼は『ヘンリー五世』の中では描いておらず、作品世界から排除している。もしシェイクスピアがこれらの事件を作品に導入すれば、彼が目指したヘンリー像の統一的イメージが壊れたのであろう。特に、ジョン・オールドカースル卿の処刑を作品内で描けば、当時の民衆の反発は明らかである。何故なら、イングランドがヘンリー八世以来、ローマ・カトリック教会の圧迫から逃れ、プロテスタントの国となってから、ロラード派の殉教者であるジョン・オールドカースル卿の評価が上がっているからである。この宗教的な変化は、シェイクスピアにとっては重要であり、ローマ・カトリックからイギリス国教会への移行は、様々な社会的・文化的変容をイングランドの世界に引き起こしたにちがいない。ジョン・オールドカースル卿の処刑ではなく、フォルスタッフの病死を劇の最初で描いたのは、この宗教的変化があったからである。このように、シェイクスピアは社会的変化や文化的変化に合わせて、史実

や事件等を自由に取捨選択して作品内部で描いていることが分かる。

確かに、Tillyard が言うように、歴史的事実（これも歴史家の解釈が多分に入っているが）の桎梏が劇作家に重くのしかかることは事実であるが、その桎梏を巧くすり抜けて、文化の固定化に揺らぎや衝撃を与えることは、劇作家にとって容易なことであった。Gary Taylor も、注釈書『ヘンリー五世』の中で、シェイクスピアがフランス女王の性格を材源と違うものにするにより、平和、愛、文化を描くことができたと論じ、次のように述べている。

... while the transformation of Isabel from the dissolute and treacherous figure of history into the moderate, gracious, dignified queen of 5.2 helps to summon up the social world of peace, love, and civilization which the play has until then excluded.<sup>(3)</sup>

ただ、シェイクスピアは『ヘンリー五世』の中で、フランス人捕虜の殺害命令だけは省略していない。『ヘンリー五世』の前に上演された劇の中では、その場面は描かれていないのに、シェイクスピアはその史実に固執している。彼はヘンリー像を一筋縄ではいかない複雑な像として観客に提出したかったのであろう。

シェイクスピアが史実を微妙に変化させている事例は、他の作品にも見られる。例えば、『ヘンリー四世』の中で、ヘンリー四世は治世一年目でエルサレム遠征を計画し、リチャード二世殺害の贖罪を考えているのに、ホリンシェットの『年代記』では、ヘンリー四世は死の一年前にその遠征を計画していることになっている。シェイクスピアがこのように史実を変化させたのは、観客の同情をヘンリー四世に引きつけようとしたものであろうが、主な変更の理由は、ヘンリー四世の贖罪というテーマを、この作品で大きく取り上げたかったからであろう。ここでもシェイクスピアの作劇態度が、かなり自由であったことが明確になる。劇作家は、題材の選択、強調の仕方によって、作品のテーマを自由に浮き上がらせることが可能である。さらに、シェイクスピアの自由さを示すものとして、彼はホリンシェットの『年代記』からヘンリー四世とパーシー家との争いを取り入れ、伝統演劇からはハル王子の放蕩生活を描いており、先行する演劇や歴史劇から自由にアイデアを取り入れていることが明らかである。『ヘンリー四世』の注釈者である Herbert Weil と Judith Weil は、その点を指摘して、次のように論じている。

Two of these are especially influential: one, Holinshed's *Chronicles* (1587) for the King's struggle with the Percys, leading to the battle of Shrewsbury; and the other, popular dramatic traditions for the behaviour of the prodigal Prince and his riotous companions.<sup>(4)</sup>

作家の自由な作劇態度が文化の変容を迫るものであることは、以上の論述で明確になったと思われる。演劇活動、広く言えば、文化創造活動は、それまでの固定化していたイメージを再び流動化させ、文化的変容へと結びついていくのである。シェイクスピアと彼を取り巻く文書や劇との出会い、シェイクスピアとユダヤ人などの異文化接触等により、シェイクスピアは自国の文化に揺らぎを与え、その文化に変容を迫るものである。繰り返しになるが、文化変容——庶民の常識の揺らぎ——を起こさない演劇は凡庸な演劇であろう。

## 3

これまでシェイクスピアの作品が、どのようにして自由に文化・歴史の変容を行っていたかを考察してきた。この節では、シェイクスピアが参考にした歴史書自体が、いかに歴史や文化の変容を行ってきたか、あるいは行わざるを得なかったかを考察してみたい。まず、エリザベス朝時代で有名な歴史書は、これまでも取り上げたホリンシェットの『年代記』とエドモンド・ホールの歴史書であるが、まずこの両者からして取り上げる人物や事件について微妙に対立していることは興味ある事実である。まず、リチャード二世の描写についてであるが、ホールはリチャード二世の廃位を同情して描いているが、ホリンシェットはその哀愁をきっぱりと排除している。ホールはリチャード二世への個人的な同情という立場で描いているが、ホリンシェットはリチャード二世の廃位に関しては、当時の議会の介入が重要な役割を果たしているとして描いており、歴史書としてはホリンシェットの記述が信用できると思われる。ホリンシェットの歴史書は、シンジケートとも呼ぶべき集団が書いており、そのためホールより客観的であることから、このような差異が生じたものと思われる。

だが、いつもホリンシェットが歴史的事実に近いかというところでもない。ホールは1414年から1415年にかけて行われたコンスタンス会議（Council of Constance——教皇庁の大分裂に終止符を打った会議）を、ヘンリー五世の温和な統治の証拠として考えているのに、ホリンシェットはまったくコンスタンス会議を無視している。ホールとホリンシェットの歴史書の価値はどうか、歴史書自体がこのような矛盾を露呈しているため、シェイクスピアのような作家は、歴史における「真実」が、実は非常に曖昧なものであることを見抜いたことであろう。Annabel Patterson は、ホリンシェットの『年代記』はホールの歴史書の後継者ではなく反論であると、次のように論じている。

... Holinshed's *Chronicles* can be reconceived, not as the successor to Hall's *Union*, but rather as a counterstatement: the evidence of diversity that historical inquiry discovers must not, at whatever cost to the historian, give way to the principles of unity and order.<sup>(5)</sup>

ホリンシェットもホールも同じ歴史書を書いたのであるが、ある人物や事象に対してまったく異なった記述をする事実は、歴史の記述も個人の恣意的な意向が反映されていることを明白にしているが、歴史書を書くこと自体が、文化の変容を迫るものであると言える。歴史書はそれまでの文化的遺産である歴史を固定化することであるが、その固定化こそが歴史記述に関わる人物による文化変容に他ならない。後世の歴史家も歴史書を書くことによって自分自身の歴史をつくり、その社会の文化を変容していくことになる。

同じジャンルの歴史書でも、人物や事件についての解釈が違うが、歴史書と演劇もまったく解釈が異なっていることもある。例えば、ホリンシェットとジョン・バール（John Bale, 1495–1563, イングランドのプロテスタント牧師・著作家・劇作家；多くの宗教劇・宗教論争書を書いた）は、ジョン王に対してまったく異なった描写をしている。ジョン・バールは、最初の歴史劇と言われる *Kynge Johan* で、ジョン王を勇敢な英雄として描いているのに、ホリンシェットは逆に専制君主として描いており、その結果、マグナ・カ

ルタのような事件が引き起こされたと、その因果関係を明白にしている。演劇は観客の歓心を得るためのものであり、歴史書が歴史の「客観的」な記述であるとするれば、上記のような違いがあるのは当然と考えられるが、同じ人物をまったく性格が正反対の人物のように描かれることは、歴史の解釈が個人の恣意的な解釈に大いに影響を受けることの証左であろう。

面白いことに、同じホリンシェットの歴史書でも、第一版と第二版の編集方針が違うのである。「ホリンシェットの歴史書」という名称であるが、ホリンシェットは第一版の編集に主に関わったのであり、第二版はエイブラハム・フレミング (Abraham Fleming) が、中心となって編集や修正を行った。フレミングの修正は、この歴史書の *multivocality* を増加している、と Annabel Patterson は指摘している。<sup>6)</sup> すなわち、ある事象をいろいろな視点から眺めることができるように、第二版のホリンシェット『年代記』は構成されているのである。換言すれば、歴史に対する視点の複線化と表現できよう。

## 4

このような様々な先行歴史書の多様な解釈を目の当たりにして、シェイクスピアは歴史的事実の解釈の自由性をすぐに見破ったことであろう。彼は、『ベニスの商人』を書き、それまで曖昧に存在したユダヤ人への嫌悪感を極限にまで高め、当時の人々の認識を一変させ、また歴史書や先行劇から自由に歴史や文化を変容して『ヘンリー四世』や『ヘンリー五世』を書き、『テンペスト』の中では、異文化接触による文化の変容を描いているのである。『テンペスト』の中では、それまでの異文化接触とは根本的に違うものであるから、その変容はより深刻なものになり、シェイクスピアは魔術へ逃避せざるを得なかったのかもしれない。『テンペスト』における文化変容の問題は、稿を改めてじっくりと追究してみたい。

## 注

1. シェイクスピアの作品からの引用はすべて、G. Blakemore Evans (ed.), *The Riverside Shakespeare*, second edition (Houghton Mifflin Company, 1997) からのものである。
2. J. H. Walter (ed.), *King Henry V* (Methuen, 1954), p. xiv.
3. Gary Taylor (ed.), *Henry V* (Oxford U. P., 1982), p. 32.
4. Herbert Weil and Judith Weil (eds.), *The First Part of King Henry IV* (Cambridge U. P., 1997), pp. 18-9.
5. Annabel Patterson, *Reading Holinshed's Chronicles* (University of Chicago Press, 1994), p. 15.
6. Annabel Patterson, *op. cit.*, p. 9.

フレミングがホリンシェットの死後中心的な編集者になったことは、Elizabeth Story Donno も認め、次のように論じている。

The very competent antiquary Abraham Fleming, a Cambridge man, functioned as the primary editor, having “sweated mightily,” as it is put in the acknowledgements of contributors, with his many textual additions striking a patriotic and moral note and his extensive indices. (231)

Elizabeth Story Donno, "Some Aspects of Shakespeare's Holinshed," *Huntington Library Quarterly*, 50 (1987)

## Acculturation—Application to Shakespeare's Works

Michio Tokumi

Acculturation, especially in relation to Asian cultures, has become the focus of much recent research. In comparison, however, relatively little work has been carried out in Japan on the acculturation of European societies. In Shakespeare's *Tempest*, we see a moment when Alonso's perception of European culture might change because of his encounter with a strange being, Caliban. This paper will try to apply the theory of acculturation to Shakespeare's works, particularly to his Histories that have been considered to be unconnected with acculturation. To make a play reflects some kind of acculturation and challenges people's perception of culture. We can say that any masterpiece should challenge and change people's perception of culture. This approach may forge a connection between the theory of acculturation and Shakespeare's works.